# 2013年度　長大生が選ぶ

# “残したい長崎の音風景16選”

Copyright ©2014 Osamu Nishida　All rights reserved.

## 目次

はじめに ..... - 3 -
取組みの概要 ..... - 3 -
１．香焼総合運動公園の展望台 ..... - 4 -
２．稲佐山展望台 ..... - 5 -
３．防災無線から流れるメロディー ..... - 6 -
４．山王神社 ..... - 7 -
５．城山小学校　かよこ桜 ..... - 9 -
６．路面電車 ..... - 11 -
７．浦上天主堂 ..... - 13 -
８．平和公園～願いのゾーン～ ..... - 15 -
９．長崎くんち ..... - 17 -
１０．長崎ランタンフェスティバル ..... - 19 -
１１．長崎検番 ..... - 21 -
１２．龍踊 ..... - 23 -
１３．精霊流し ..... - 25 -
１４．水辺の森公園 ..... - 26 -
１５．長崎大学文教キャンパス裏の浦上川周辺 ..... - 27 -
１６．権現山展望公園 ..... - 29 -
おわりに ..... - 31 -

## はじめに

静かに目を閉じると、そこには耳で感じるとる音の風景が広がる。普段は聞き逃されている音たちが重なり合い、一つの音の風景を構成する。それは、目で見る風景と同様に、何気ない風景もあれば特別な風景もある…。

そして、何気ない音の風景の中にも素敵なものがたくさんあります。本冊子では、そんな日常にある長崎の音風景を１６ヶ所ご紹介します。

これらは、長崎大学の学生約６０名が協力して選んだものです。長崎県出身の学生が選んだものもあれば、他県出身の学生が選んだものもあります。地元の学生だからこそ知っている音の風景もあれば、他県出身の学生だからこそ気がつける視点もあります。そして、そのどれもが大切な音風景です。実際に聞いてみていただくのが一番ですが、先ずは推薦文と写真を手掛かりに音の風景を想像してみるのも楽しみ方の一つかもしれません。

本取組が、日常の音風景に耳を傾けるきっかけとなること、長崎の魅力を再発見するきっかけになれたら幸いです。

## 取組みの概要

本取組は、長崎大学教養教育の講義である「ことばと文化Ⅱ　音楽と言葉」の講義の一環として行われました。選定にあたっては、以下二つの視点を設けました。

「地域のアイデンティティとして大切にしたから残していきたい音風景」
…主として県外に発信
「心が安らぎ、誰かと共有したくなるような音風景だから残したい音風景」
…主として県内に発信

前者として選ばれたのが選定番号１～１３番の音風景であり、後者として選ばれたのが１４~１６番の音風景になります。選定するにあたって注意した点は、特別な努力をしなければ聞けない音風景は除く、プライバシー保護の観点から公の場を対象とする、選定することで不利益が生まれない音風景であること等です。選定することで不利益が生まれないよう様々な視点から検討し、紹介文も配慮して作成していますが、お気づきの点がございましたら長崎大学教育学部の西田（osamu-n@nagasaki-u.ac.jp）までご連絡いただけましたら幸いです。

## １．香焼総合運動公園の展望台

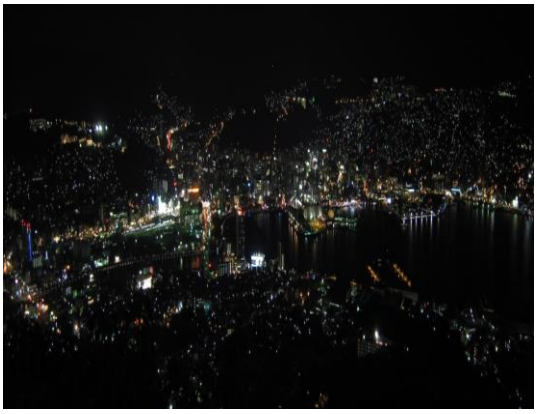
アクセス：長崎駅から長崎バス「香焼恵里」行きで 40 分、「香焼恵里」バス停で下車で徒歩 10 分ほど。

香焼総合運動公園は長崎らしい山道を登って行ったところにある。車で移動しながら私はどんなきれいな景色が見られるのだろうとわくわくしていた。この場所は、交通手段として車がないと行くのは大変かもしれない。しかし、移動している間は長い長い山道を登っていくので「こんなに登っていくということはとても高いところから私たちが住む長崎を見下ろすことができるんだろうな」「どんな景色が見られるんだろうな」という期待で到着するのが楽しみになると思う。私も初めて行った際には、そういった感情でいっぱいになった。到着してみると、やはりとても高い場所にあり、肌にあたる風も心地よいものだった。この香焼総合運動公園の展望台からは、360 度、長崎の町を見渡すことができる。その景色は、とても美しいものである。海と山に囲まれており、感じるのは自然だ。カモメがピーピーと鳴きながら目の前を飛び、風がさらさらと体全体を包むのは、とても幸せな気分になる。立ち止まって耳を澄ませてみると、聞く音のすべてが体にやさしく染み込むような感覚を覚える。目を閉じて耳を澄ませてみると、視覚的にとらえていた長崎の景色とはまた違った、長崎らしい音というものを聞くことができる。葉っぱが揺れる音をはじめとして、風の音、鳥の羽ばたく音、様々な自然の音というものが聞こえてくる。また、この場所は、天気、季節、時間帯などにより違った音を聞くことができる。こういった音の変化がある場所はとてもおもしろい。もしかしたら、一人ひとりの気分によっても聞こえる音は変わってくるのではないだろうか？（村上　侑）

作成協力：廣瀬　美咲、前　めぐみ

## ２．稲佐山展望台

アクセス：
ロープウェイまでは、長崎バス３・４番系統（下大橋・小江原・相川行き）に乗車し、ロープウェイ駅前で降車しロープウェイを利用する。駐車場もあり、車やバイクで行くことも可能。



皆さんは空を飛んでいるような体験をしたことがあるだろうか？稲佐山の展望台では、そんな夢の様な体験をすることができる。私が訪れたのは１月 17 日の夜 12 時頃だ。今日はどんな夜景が見られるのだろうとドキドキしながら階段を駆け上がると、その先には想像以上の長崎の夜の町風景が綺麗に映し出されている。夜遅くにも関わらず電気が点いている家庭も多く、アミュプラザ近辺のイルミネーションも美しく輝いていた。大きなオリオン座などキラキラ光る満天の星空も一望でき、冬の澄んだ空気によって鮮明にくっきりと景色を見ることができる。世界新三大夜景の一つを十分堪能したあとに、目をつぶって音に集中する。刺さる様な冬の寒い風が山の木々にぶつかってザワザワと夜の不気味さを際立たせる。海の波がザブンと打ち寄せる音も聴こえ、その音は強弱がある。誰かの「わぁ綺麗！感動」という声が聴こえると、先ほど見た稲佐山の風景がよみがえる。輝く長崎と星空と海と山。そこに風が通りぬける。そのひと時は、まるで自分が長崎の夜空を飛んでいるかのように感じさせるのだ。稲佐山の音風景は、自分で見た景色と聞いた音により、自然と一体化したような気持ちになれる。長崎という街並みを体で感じられる。

そんな夢の様な体験ができる稲佐山の展望台には、ロマンチックな透明のゴンドラが特徴のロープウェイがおすすめだ。駐車場もあるので車やバイクで行くこともできる。皆さんもたくさんの希望を胸に、心の中で空を飛んでみないだろうか？（大谷　珠々音）

作成協力：伊南　香穂、古田　美穂

## ３．防災無線から流れるメロディー

アクセス：電停大橋で下車。サントス通りを歩いて 5 分。
防災無線のある場所：山里小学校付近

「平和への誓いを新たに緋の色の鶴を折る」から始まるメロディーを聞いたことがあるだろうか。この曲は今から 19 年前、被爆 50 年の節に、被爆 50 周年記念歌として誕生した。歌詞は長崎市が公募し、応募作 1,947 点の中から、千葉県の島根大学名誉教授、横山鼎さんの作品が採用された。曲は長崎出身の作曲家である大島ミチルさんがつくったもので、被爆 50 周年記念講演会の際に、純心女子高校音楽部員の合唱により初めて披露され、長崎市ではＣＤ1,000 枚を製作して学校などに配布、普及がはかられた。長崎市では毎月 9 日 11 時 2 分、この千羽鶴のメロディーが市内 215 か所すべての防災無線から流れる。この平和世の中で原爆を想起することが少ない市民が平和の大切さに触れる機会になるように、と 2001 年の 1 月 9 日からはじめられた取り組みである。

ところが、長崎市民でもこのメロディーの意味を知る人は少ない。　だからこそ、この音風景を選定することで、多くの人にこの防災無線から流れるメロディーを知ってもらいたい。長崎市ならではのこの音風景は、地域のアイデンティティとしてこれからも大切にしていくべきである。

毎月 9 日の 11 時 2 分。防災無線から流れるメロディーを聴いてみてはいかがだろうか。(竹島彩季)

作成協力：青野颯希　羽田野公輝　坂本由香梨

## ４．山王神社

アクセス：長崎バス 坂本町バス停 徒歩 2 分
　　長崎電気軌道 大学病院前停留場 徒歩 5 分

長崎といえば原爆を思い出す人も多いだろう。その原爆を思い出すときに訪れるのは、やはり平和公園や原爆資料館だろうか。実は長崎には、それ以外の場所でも原爆の爪痕を残す場所がある。その中の一つが長崎大学病院の近くにある「山王神社」だ。山王神社には、今でも被爆した楠が生きており、さらに爆風によって一本となった鳥居が残されている。鳥居は、数十メートル離れた場所にあり、今は神社から一緒にみることはできないが、今もなお 1 本のまましっかりと立っており、さらに爆風で飛ばされたもう片方の鳥居も近くに保存されている。

その鳥居を見て、境内の方へと進む。すると、大きな楠が境内の入口に 2 本あり、その間を通っていくからだろうか。境内に入ると、いつも落ち着いた気持ちになる。落ち着いた気持ちのままで、目を閉じ、耳を澄ませると、さまざまな音が聞こえてくる。朝は、鳥のさえずり、竹箒で境内を掃除する音、隣の保育園にやってきた子供たちの元気な声、地域の人が朝の散歩に訪れた足音などが聞こえてくる。昼は、かすかに遠くを走る車の音や観光に訪れた方に説明するガイドさんの声が届く。夕方になると、保育園児が帰っていく声や買い物袋を提げたお母さんたちの足音が聞こえてきて、さらに 5 時を告げる鐘が神社や地域一帯を包み一日の終わりを感じる。

こういった普段の神社もいいが、行事をやっている山王神社もおすすめだ。

元日の早朝、境内に入るとすぐに石畳の上を歩く音がする。トントンッとリズミカルに音を立てる自分や人の足音が心地よく感じた。いつもとは違い、太鼓の力強い音が、鳴り響き、その音が境内のあちこちに反響して、何重にも音が重なって聞こえた。神社についてすぐに太鼓の演奏は終わってしまった。太鼓の余韻が小さくなっていくにつれて、つい先ほどまで太鼓の音に聞き入っていた人々が一斉に話し出し、新年のあいさつを交わす人たちの声が大きくなる。奥に進んでいくと、境内の鈴を鳴らす音が聞こえてきた。遠くからでもはっきり聞こえる鈴の音は存在感があり、かなり印象的な音である。

一時その場にいると、ちらほら参拝客が減っていき、いつもと変わらない静かな山王神社にもどっていた。

今もなお原爆の爪痕をのこしながら、人々の生活の中の一部となり、見守ってくれているような神社である。長崎に訪れた際には、平和公園や原爆資料館とも比較的近い場所にあるので、山王神社にもぜひ一度立ち寄ってみてはいかがだろうか。

作成者：塩屋望、溝田晴菜

作成協力：中尾萌、山崎聡子、塩屋望、溝田晴菜

## ５．城山小学校　かよこ桜

アクセス：長崎電気軌道（路面電車）

1 号系統・2 号系統・3 号系統「松山町電停」下車後、徒歩 5～10 分

バス

長崎バス「市民プール前」下車後、徒歩 5 分

長くつづいた正面の階段を上りきったところを左側に少しのぼったところ、そこにかよこ桜はあった。目を閉じてはじめに聞こえてくるのは鳥がチュンチュンと鳴きあいパタパタと飛び交っている音。かよこ桜の反対側に並んでいる坂の通りにある木の葉が風になびき、ササっと小さな音を立て鳥たちが作り出す元気な音を際立てる。

かよこ桜の傍で聴こえる音は、桜の枝がサワサワと揺れる音をはじめ、子どもたちの笑い声、小鳥のさえずり、そして平和を願うモニュメントとして建てられた「平和の鐘」の音など心安らぐ音が多く、空に浮かんでいるような気持になる。その一方で、山に囲まれた長崎では遠くからでも音が響いてくるため、道路を走る車のドォォォといった音や、路面電車のガタンガタンという音、「バイバイ」「マタネ」と言い合う子どもたちの声、そういった人々の生活音により現実に引き戻される。目を開けて後ろを振り返ると町が一望でき、異世界にいるような気持ちになった。

この桜は、1945 年の原爆で亡くなられた生徒・林嘉代子さんを偲び、嘉代子さんの母親の津恵さんが城山小学校へ贈ったものである。被爆後、植物は育たないといわれていた土地に根を張り、美しい桜の花を咲かせたその生命力から、平和のシンボルとして有名だ。

今現在、老齢の桜の木には多くの支え棒がつけられており、人々が近づけないように柵で囲まれている。目で見ると切ない風景だが、目を閉じて耳を澄ますととても暖かい気持ちになる。時代が進み被爆地である長崎が復興し今を生きているという実感と共に、過去の出来事を忘れてはいけないと思わされた。

また、私たちが訪ねた季節は冬でかよこ桜の葉は落ちていたが、春になるときれいな花を咲かせるため、時季によって聞こえる音はかわってくるだろう。

城山小学校へは事前に申し込みすることで見学が可能だ。一般の小学校であり、原爆で亡くなられた方の思いがつまった場所でもあるため、見学をする際はそのことを考慮しマナーを守るようにしたい。

作成者：武本かれん、伊藤五月

城山小学校へ続く階段　　正門横の小道から

冬のかよこ桜

## ６．路面電車

アクセス：JR 長崎駅（または浦上駅）出てすぐ。
長崎市内（赤迫～正覚寺下・蛍茶屋・石橋）

以下、路面電車の音風景について 2 つの視点から紹介する。

チィィィン。。。
「あ、すいません降りまーす。あ、すいませーん、降りまーす。あ、すいませーん…」
今日も多くの人が路電に乗りあう。長崎文化の一角を担う、路面電車の音風景を紹介したい。
どつどつどつどつどつっ。車内にはエンジンの低音が響きわたる。
絶え間ない乗客の会話から聞こえてくるのは、観光に来た外国人の外国語や修学旅行生の少しはしゃいだ声だ。どちらも被爆の地として、平和への意識を高く持つ長崎でよく見かける乗車客だ。
たまに「どうぞ」と席を譲る声が聞こえると心がホッコリする。
「あ、すいません、大丈夫です。」と断られると、少しショックだ。
駅と駅の間には、陽気な CM が軽快なリズムを刻む。雨の多い長崎でも、この CM の陽気さは憂鬱さを和らげてくれる気がする。
個人的に好きな音は、路電が信号で止まった時に聞こえる「・・・プシューッ」という音だ。
長崎電気軌道は 1914 年、大正 3 年、つまりちょうど百年前に、長崎商業所で資本金 50 万円を手に創立した。実際の路面電車は翌年、1915 年に大学病院前⇔築町で開通した。四年後にはこの路面電車の影響で、人力車の廃業が続出したという。
現在は 120 円の運賃も、当初は 5 銭だった。運賃の変動にも歴史があり、1927 年には、運賃の値上げに反対するために市民大会が開催されている。その後、6 銭、10 銭、20 銭、30 銭、40 銭、1 円、1 円 50 銭、2 円 50 銭、5 円、6 円、8 円、10 円、13 円、15 円、20 円、25 円、30 円、40 円、50 円、60 円、70 円、80 円、90 円、そして 1984 年、30 年前に 100 円へと値段が変わっている。現在の 120 円となったのは 2009 年、たった 5 年前のことだ。
通勤・通学の人たち、買い物のおばちゃん、観光客、酔っ払い。
ちんちん電車は今日も長崎の様々な人たちを運ぶ。
近年 100 年とはいえ、長崎の様々な顔を知る路面電車。
長崎の長い歴史に思いを馳せながら、一度目をつぶり、音風景を楽しんではいかがだろうか？　（安田淳）

駅を出て歩道橋を渡ると、ブーンと走る車やバスとは別に聴こえてくるカラカラカラ…ゴオオオン…シューというカラフルな音。それに沿って電停のホームへと入ってくるカラフルな 1 両の箱。それが路面電車だ。

今や長崎で路面電車を見かけない人はおらず、使ってきた人も少なくはないだろう。

特に長崎の路面電車の良い音として、私は 2 つの音の楽しみにあると考える。それは『外で聴く楽しみ』と『中で聴く楽しみ』である。

『外で聴く楽しみ』というのは、車外から聴こえてくる走行音やブレーキ音だけではない。特にそれは電停で楽しむことができる。路面電車が到着した際にドアがガラガラと開く音やそれについていくかのように乗り降りする乗客の足音、更には発車の際の警告を示す『カンカンカン…』と踏切のような音が鮮明に聞こえてくる。また道端を歩いていてもウオオオン…と走ってくる音とすれ違ったりそれに追い抜かれたりするのもまた趣深い。

『中で聴く楽しみ』には車外では聴けない音がある。その代表的なものは何と言っても『チンっ!』と鳴るベルの音だ。この音は路面電車の別名、ちんちん電車の由来でもある。しかし、中での楽しみはベル音だけではない。次の電停を告げるアナウンスの後に長崎らしい宣伝を流しており、まさに地域に密着した乗り物といえるだろう。

また、私は特に 1 両編成の車体のつくる音風景を残したいと考えている。最近になり、新型車両として 3 両編成のものが現れた。確かに 3 両編成のものにもよさがあるが、1 両編成の旧車体に比べると走行音が静かに感じ、もの寂しい感じがする。

近い将来、旧車体は利便性を求められて数を減らしていくかもしれないが、私としては旧車体でしか聴けない昔ながらの音風景を楽しんでもらいたい。

皆も車内車外の音に一度耳を傾け昔ながらの懐かしさを味わってみてはどうだろうか。

（秋山佑貴）

作成協力：安田淳、秋山佑貴、田原由梨、吉田菜津希

## ７．浦上天主堂

アクセス:電停松山で下車徒歩 10 分。バス停浦上天主堂前で下車徒歩 1 分。
アンジェラスの鐘が鳴る時間:5:30、12:00、18:00(日曜日はそれに加え、7:00)

以下、２つの視点から紹介する。

私はある昼、浦上天主堂を訪れた。この教会は、長崎市の観光名所のひとつにもなっており、毎年外国人観光客も含め、多くの観光客が訪れる。1945 年の長崎原爆によって破壊されたが、1959 年に再建された。また、原爆でこの教会が吹き飛ばされてしまう以前にさかのぼると、この教会はキリスト教徒たちが禁教令に始まる弾圧に耐え、ついに勝利を勝ち取った証でもあるという背景を持つ。

私は最初、この協会周辺の風景を眺めながら耳をすませてみた。そばには道路があり、車やバイクがブンブンと音を立てて通ったり、自転車がチリンチリンと鈴を鳴らして通り過ぎたりしていた。近くには公園があり、子供のワイワイとはしゃぐ声とパタパタと音を立てて砂利道を走る音が聞こえた。結構にぎやかな場所なのだなと思い、今度は目をつむって、ほかに聞こえる音はないかと探るように耳をすませていた。すると、急に車がいなくなったのかパタリと車の通る音が止んだ。しかし、公園で遊ぶ子供の楽しそうな声は絶えず聞こえる。急に風がびゅっと強く吹き、子供たちの声が重なるようにして、教会に立っている木の葉がさわさわと音を鳴らす。すると、教会のほうから讃美歌のような歌が聞こえてきた。美しい歌声を聴いて、中高カトリックの学校に通っていた日々を思い出し、すごく懐かしい気持ちになった。どのような内容の歌かはわからなかったが、これからの日本の平和、世界の平和を願っているような歌に、私には聞こえた。この讃美歌を聴いた後、私はゆっくりと目を開け、落ち着いた気持ちでこの教会を後にした。

この教会を長崎の音風景として残す理由は、この教会や教会周辺で聞かれる音が、平和の象徴であると思うからである。昔、原爆が投下され、戦後の長崎は大きな傷を負った。二度とこのような惨事が起こってはいけない、世界がこれからも平和でありますようにという強い思いや祈りが、教会から聞こえてくる讃美歌の歌声や鐘の音となって、世界に向けて伝えられているように私は思う。平和のメッセージを伝える大切な音として、私はここの音風景を残したい。(龍田絵梨佳)

ある日曜日の午前 12 時くらいに浦上天主堂を訪れた。日曜日のこの時間帯は周辺の車の数も比較的少ないように感じ静かな印象があった。浦上天主堂では様々な音が聞こえてくる。浦上天主堂は坂の上の周りより少し高いところにあるため、周辺の音は全体的に小さく聞こえ、天主堂が周りの環境からある意味乖離した存在であることが音という観点からも実感した。浦上天主堂の正面に立ち聞こえてくる音は道路を車やバイクが走る音、近くの天主堂公園で野球をしている人たちの「オーイ」などの掛け声、「パンっ」とボールがグローブにあたるような音、飛んでいる鳥のピヨピヨピヨ・・という鳴き声が遠ざかる音などであった。これらの例からわかるとおり浦上天主堂自体から発生する音はほとんど認識できなかった。時々、走っている車やバイクがいなくなると本当に静かな瞬間が訪れる。大きな音の合間に静かな瞬間が垣間見えるため、その静けさは際立つ。浦上天主堂というものは非常に歴史が深く、厳かなイメージがあったが実際の音風景はのどかな印象を受けた。そのような、日曜日の朝ののどかさを感じながら帰ろうとすると浦上天主堂の鐘が鳴り響いた。音は「ゴーン」という音と「カーン」という音が混ざり合ったような音だった。一定のリズムで数回なった。その日、天主堂で聞こえた音の中で最も大きい音だった。すべての鐘が鳴り終わってからも少し余韻があった。その響きは非常に荘厳であった。そしてまた車の音や、野球をする音を聞きのどかな空間に戻った。

以上に記述したようにのどかさと荘厳さを持ち合わせ、一つ一つの音に着目しても音風景として非常に秀逸だと感じ、またその音風景から得た印象やそこが浦上天主堂であるという事実が平和を象徴し、それはすなわち長崎を代表する音風景だと考えた。

(上月惇)

作成協力:　松倉汐里、山本澪、中村公隆

## ８．平和公園～願いのゾーン～

アクセス：路面電車松山町電停下車すぐ

1945年８月９日に長崎に原子爆弾が投下された。原爆落下中心地の近くに、平和の祈りを込めて設立された。観光名所としても知られており、たくさんの観光客や修学旅行生でいつもにぎわっている場所でもある。平和公園には、願い、祈り、学び、スポーツ、広場のゾーンがあり、最も平和公園の印象が強い平和記念像があるのは願いのゾーンである。

午後４時頃、平和公園に行ってきた。平和公園のエスカレーターを上がるにつれて、水が「ザーザー」と流れている音が聴こえてきた。エスカレーターを降りて進んでいくと、“平和の泉”というものがあった。途切れることなく次から次に水が溢れていた。原爆にあった人たちが、水を求めていたことを表していると表記されているのを見て、その水の音から何だか悲しい気持ちと原爆を忘れてはいけないという気持ちを感じた。平和記念像に着くまでには、風で木々がザワザワと揺れる音、観光客の人々が記念撮影をして集まっている声、表記されている文字を読んで「へえー」と感じている声が聴こえてきた。夜になると、公園内は人が少なくなり、明かりも少ないため平和記念像の迫力が増して違った印象を与える。遠くを走る車の音や救急車の音、自分の歩く足の音、自分の呼吸さえも聞こえてきて、また違った音風景を感じることができる。

原爆投下日には、記念式典が毎年行われ全国からたくさんの人々が集まる。午前１１時２分には、長崎の鐘やサイレンの音が鳴り、人々に原爆投下の時刻を知らせ、平和への祈りを新たにする。平和宣言が行われ、平和を誓う長崎の人々にとって、平和への決意をする大事な場所であると感じた。修学旅行生が平和記念像の前で、歌を唄うこともあり、平和公園には、その時その時によっていろいろな音が聴こえてくる所であると思った。

原爆を忘れない、そして平和を願うためにも平和公園は守られていくべきだと思う。そして、長崎でしか聴くことのできない鐘の音、サイレンの音は意味のある音であり、音風景に選定されるべきである重要な要素であると強く感じた。これからもたくさんの人に原爆を知ってもらい、平和を発信していく中心的役割を担う地であることからも、平和公園～願いのゾーン～は残したい長さ息のにふさわしい場所であると考える。（甲木資子）

作成協力：リンヨウ　吉田瑛美

## ９．長崎くんち

アクセス：電停「観光通り」で下車。バス停「浜の町」で下車など。
＊その他にも諏訪神社(長崎市上西山町)、お旅所(長崎市元船町)、
八坂神社(長崎市鍛冶屋町)、長崎市公会堂前広場(長崎市魚の町)

やっと秋服に衣替えしても暑くないないだろう、夜は少し冷えてくる頃、江戸時代にタイムスリップしたような「しゃぎり（お囃子)」の音の中、多くの人たちが連れ立ってわいわいと話しながら、長崎市内中心部に溢れかえる。

毎年 10 月 7，8，9 日の 3 日間は「長崎くんち」が行われる。「長崎くんち」は長崎の氏神「諏訪神社」の秋季大祭。寛永 11 年（1634 年)、二人の遊女が諏訪神社神前に謡曲「小舞」を奉納したことが「長崎くんち」の始まりといわれる。以来、長崎奉行の援助もあり年々盛んとなった。この長崎奉行の援助の背景には、国が躍起になっていた「カトリック信者追放」がある。長崎は鎖国下の日本において唯一「出島」にて外国との交流が行われていた。そのため、奉納踊りには異国趣味のものが多く取り入れられ、江戸時代より豪華絢爛な祭礼として評判である。今では、奉納踊りは国指定重要無形民俗文化財に指定されている。

期間中、長崎市内はたくさんの音で溢れかえる。イヤホンを付けて音楽を聴こうとしてもきっと周りの音でかき消されるほどである。ためしに浜の町アーケードを歩いてみよう。浜の町アーケードはデパートや書店、呉服店、本屋など古くからたくさんの店が並んでいて、アーケードの手前には期間中、多くの出店が立ち並ぶ。客引きをする「いらっしゃい」という出店のおじさん。綿菓子の機械が「ウィーン、ウィーン」と回る音。「カチッ…パッ」。小学生くらいの男の子たちは射的に夢中だ。夜になれば出店には明かりが灯り、大学生の私が言うのも変だが、昭和にタイムスリップしたみたいな懐かしい気持ちになる。簡単に言えば、映画「ALWAYS 三丁目の夕日」で見たような光景である。

アーケードの中は一日中「しゃぎり」が鳴っている。これは録音のものである。本物の「しゃぎり」は奉納踊りが長崎市内の玄関先、店先、門前等で行われる「庭先回り」で聴ける。もちろん、浜の町アーケードの中にはたくさんの店が立ち並ぶため、全ての奉納踊りが 3 日間の間にアーケード内にやってくる。奉納踊りを行う一行がやってくると、アーケードの中には奉納踊りを一目見ようと、人だかりができる。それぞれの奉納踊により異なるお囃子と、出し物の船を動かす根曳衆たちの掛け声、出し物が回るときにアーケードの石畳がすれる「ギギギギギギギ」という音、出し物を撮るカメラの「シャ、シャ」というシャッター音と応援する拍手。それからアンコールを求めるときにかける「もってこーい」の声でアーケード内はいっぱいになる。この「もってこーい」の掛け声は、コンサートの最後にアンコールを求める際にも使われる長崎ならではのものでもある。

街中が活気に溢れるこの時期、長崎の人々が作り出すお祭りの音とそこから伝わる趣深くも活気あふれる雰囲気から元気をもらい、毎年長崎の秋の訪れを感じる。（辻田啓子）

作成協力：石藏友保子、岩永千明、米山千尋、大谷愛

## １０．長崎ランタンフェスティバル

アクセス：浜町アーケードへは、観光通り電停から徒歩数秒
　　中華街へは、築町電停から徒歩三分

長崎ランタンフェスティバルは、長崎に住む華人が旧正月を祝う祭りを長崎新地中華街で行っていた春節祭という祭りが原点である。1994 年より長崎市全体でのイベントとなり、中華街以外の場所にも中国ランタンが飾られるようになった長崎特有のお祭りである。旧暦の１月１日を初日として約 2 週間、新地中華街を中心に１万数千個のランタンや点灯式のオブジェが飾られる。暦の関係で、年ごとに開催期間は前後に移動し、２０１４年は１月３１日から２月１４日まで開かれる。

代表的な場所での音風景について紹介する。

浜の町アーケードでは様々なイベントが行われる。そんな中アーケード内を歩いていると聞こえてくるのが、出店から聞こえる人の声、中国風の BGM、外国人観光客の声、いつもより多い足音である。賑わいを見た目だけでなく音で感じられる。アーケード内でイベント（龍踊りなど）が始まると“すごいねー”と話す声、それを応援する声、リンリン・シャンシャンという鈴の音、かんかん・ポンポコという中国の打楽器音が聞こえてくる。わくわく・ドキドキしてくる。アーケードを通り抜け、続いて向かったのは中央公園だ。

中央公園でも様々なイベント（獅子舞、中国百面相など）が行われる。新年を祝うバババババッという爆竹の破裂音に驚かせられ、胡弓を代表とした様々な中国固有の楽器の音色にうっとりし、皇帝パレードというパレードの列が遠くから近づいてくるときに

聞くことのできる音（音の強弱がある）にふつふつと気持ちが高ぶる。中央公園でも音を楽しめるとは・・。

こうした場所以外でもランタンフェスティバルは開催されており、それらの場所を実際に訪れることで音風景の発見が可能である。

なぜこうした音風景を残したいかというと、理由は２つある。

一点目は、長崎県内外の人も新しい音風景の発見ができるからである。県外の人にとっては、長崎ならではの音が多く、目新しいものばかりである。また県内の人にとっては、お店の音やアーケードの喧騒も慣れ親しんだ普段の生活の音だが、そこにランタンフェスティバルでは出店や観光客の声、いつもとは違う中国風の BGM など非日常の音が加わり、新しい発見ができる。よって、訪れた人皆がそれぞれ新鮮な音風景を感じることができる。

二点目は、長崎ランタンフェスティバルは長崎特有だからである。ランタンフェスティバルは他の県では見ることができない幻想的で美しい祭りである。その祭りの中で聞こえる音は、重なり合いながら冬の長崎の音風景を形成している。このような長崎特有の祭りでしか聞くことのできない音を後世に残していきたい。

作成者：金子明日香、趙光宇、椎恵里奈、林浩之

## １１．長崎検番

アクセス：長崎くんち(10/7,8,9) 電停諏訪神社前で下車
梅園天満宮例大祭(11 月初旬) 電停思案橋で下車
お座敷(料亭花月、橋本料亭、など) ※要料金

今回、長崎のサウンドスケープを選定するということで、長崎検番の「長崎ぶらぶら節」を推薦する。長崎検番はかつて京の島原、江戸の吉原と並ぶほど栄えた遊郭であり、今でも丸山ではもちろん、料亭や長崎くんち、梅園天満宮例大祭で会うことが出来る。

サササ、と衣擦れの音をさせながら、芸妓衆がやってくる。どこかそわそわ、ざわざわとした空気の中、カン、カン！と甲高い音で拍子木が鳴らされ、三味線、あたり鐘、太鼓による伴奏が聞こえてくる。そして、それにあわせて地方の芸妓衆の歌声が「長崎ぶらぶら節」を奏でる。「はた揚げするなら金比羅風頭　帰りは一杯機嫌で瓢箪ぶうらぶら　ぶらりぶらりというたもんだいちゅ」「遊びに行くなら花月か中の茶屋 梅園裏門たたいて丸山ぶーらぶら ぶらりぶらりというたもんだいちゅ」といった長崎ならではの歌詞を、伸びのあるしなやかな声で歌う地方と舞い踊る立ち方の芸妓衆は目にも耳にも美しい。もう一度拍子木が鳴らされ、ぶらぶら節が終わると盛大な拍手が送られるが、それと同時に観客の「ショモーヤレ」の声が次々と重なる。この「ショモーヤレ」という言葉は、おくんちの時に使われる「モッテコーイ」と同じ意味で、アンコールを希望する掛け声である。人々の掛け声で賑やかしくなった雰囲気は、ぶらぶら節が歌われているときと打って変ったように違って面白い。

またお座敷に呼んだ場合、検番の方々は踊りだけでなくお客様と一緒にお酒を飲みながら話をすることもある。検番の中には若い方もいらっしゃるが、踊りを披露する際にはとても落ち着いており、おしろいを塗り紅をさしているためまるでお人形さんのように見える。しかし、お客様と話をしている姿を見ると、普通の若者と同じようなしゃべり方をしていたり、笑っていたりと、ギャップを感じつつもとても親近感がわく。

長崎検番は前述のようにかつては非常に栄えた花街であった。しかし今日ではその規模も小さくなってしまっている。知名度も低く、時には長崎県民でさえ知らないこともある。そのため今回このサウンドスケープに選定することで、少しでも知名度を上げ長崎検番の伝統を守っていきたい。長崎独特の歌詞や踊り、また美しい芸妓の方々を将来にも長く受け継いでいくため、残したい長崎の音風景に推薦する。

作成者：井上瞳、梅原彩加、江口めい

## １２．龍踊

アクセス：長崎くんち(毎年 10 月 7、8、9 日)の場合

諏訪神社

蛍茶屋行の路面電車に乗車、諏訪神社前で降車。徒歩３分。

公会堂

蛍茶屋行の路面電車に乗車、公会堂前で降車。徒歩１分。

龍衆と観客の二つの視点からこの音風景を紹介する。

まず、私は龍衆の視点から龍踊りを紹介する。

龍踊りは数千年前、中国で雨乞いの儀式として行われていた。それが江戸時代に長崎へ伝わり、今では長崎の伝統芸能となっている。龍踊は龍が太陽や月を追いかけている様子を表している。龍が玉を飲み込むことによって空が暗転し雨雲を呼び雨が降ると信じられている。

10mほどの長さの胴体を龍衆と呼ばれる踊り手が上下左右に動かし、太陽や月に見立てた玉を追いかけていく。私は龍踊部に所属しているため、実際に龍衆として演技をすることがある。演技の時は始まるまで会場の裏で待機して、風の音を表すドラの“ガーン”という音が会場に響き渡るといよいよ演技が始まる。その後、太鼓の音、ラッパの音が鳴り、パラ、キャン、バチと続く。この楽器の音が数千年前の中国の音風景を再現している。ゆっくりとした演技ではこの楽器の音に合わせて龍を動かす。６回目のドラの音で龍の顔を後ろに向け、７回目で顔を前に向けるといったように楽器の音主体で演技が進んでいく。最初に龍が玉を探している段階では楽器の音はゆっくりと流れる。しかし、龍が玉を見つけ龍衆が走り出すと楽器の音は力強く、速くなる。ドラの “ガーン”という音は心臓にまで響いてきて、何度聞いても気持ちがよく、気分が高ぶる。1 つの演技が終わると龍は会場裏に走って戻りだす。するとすぐに会場の何人かのお客さんから “モッテコーイ、モッテコイ”の掛け声がかかる。“モッテコーイ”とは長崎特有の“アンコール”の掛け声である。だんだんと周りのお客さんも言い出し、最後には会場全体を包み込む。裏に戻りその声をよく聴くと、お年寄りの声、小さな子供の元気な声、男性の声、女性の声など色々な人の元気な声が聴こえる。この声を聴くと龍を振った疲れも和らぎ、何度でも頑張ろうという気持ちになる。私はこの“モッテコーイ”という掛け声が龍踊りの音の中で一番好きな音だ。

海を渡って数百年前に長崎に伝わってきた龍踊り。その昔から変わらない龍踊りの音をこれからも残していきたいと思う。(行村岳哲)

次に観客からの視点で紹介する。

ある年の十月の七日の朝。夏の暑さも少しずつ和らいできた頃、長崎市にある諏訪神社にはたくさんの人が集まり「もってこーい！もってこーい！」の声が響いていた。一つの町は七年に一度しか奉納ができないためにどの町も気合が入っている。今年のおくんちのトリは龍踊である。舞台には初めに大きな傘鉾が現れた。「ひゅーらりー」シャギリの音楽が流れる。「りーんりーん」傘鉾の中には鈴が入っているため一歩一歩、歩くたびに鈴の音が鳴る。そして傘鉾がたくさん回ると、お客さんから「よいやー！」という声が飛び交った。これは傘鉾に対して褒める言葉である。傘鉾の奉納が終わるといよいよ龍踊の奉納になる。まず、楽器を持った男の子たちが並んで入場してきた。これは唐楽拍子と呼ばれ、龍が舞うときの音楽で楽器ひとつひとつに意味がある。龍踊の楽器は長喇叭(ながらっぱ)、大太鼓、パラ、大銅鑼(おおどら)、バチ、キャンの６種類からなっている。それぞれ長喇叭は龍の鳴き声、大太鼓は雷の音、パラは雨の音、大銅鑼は風の音、バチは風の音を強調する役目、キャンは中国情緒を表す音である。それから龍の登場である。観客から待ってましたと言わんばかりの喜びの声が出る。まず龍を操る人たちである龍衆が並ぶ。泣き出す龍衆もいる中、励ます野太い声も聞こえる。いよいよ奉納踊りの始まりである。「かつ、かつ、かつかつかつかつ」「どん、どこすっとん」「シャン」「っかっかんかん」まずはゆっくりとしたスピードの龍囃子が聞こえる。ゆっくり龍が回り出し、だんだん拍子も龍の動きも早くなる。「ぴゅーらーらー」龍の鳴き声を表すラッパの音。「じゃーはー！」という龍衆の声。「ザーッ」龍のうろこが石畳に当たる音もする。同時に「パンッパンッパンッパンッ」という爆竹の音。「パチパチ」という拍子に合わせた観客の拍手。全てが一体化した音楽として聞こえエネルギーに満ちているのが伝わる。しばらくすると龍がとぐろを巻き拍子もゆっくりに変わる。「バサバサ」龍のしっぽが激しく動き龍がイライラしている。するとまた拍子が変わり龍が階段を下っていく。すぐさま聞こえる「もってこーい」の声。龍はアンコールに応え、階段を上がってゆく。（河村海帆）

作成協力：日隈瑞貴、末吉麟

## １３．精霊流し

アクセス：長崎市内各地（長崎県庁坂周辺、五島町周辺で盛大に行われる）
長崎市五島町：長崎駅から徒歩５分

昼まで通りをぶらぶらしていた。昼を過ぎると観光通りの人々はどんどん減っていく。店もシャッターを下ろしだした。そしてシャッターにはどれもこんな張り紙がされていた。「精霊流しのため本日は休業いたします。」そう。今日は精霊流しの日だ。

私は精霊流しを見るのは初めてだ。どうにもうるさいとのことで、長崎出身の母には耳栓を勧められた。暗くなるまで時間がある。県庁坂を上って下って、大波止・夢彩都まで来た。夢彩都の前にはすでに人だかりと警備員。道が広いので座って待つにはちょうどいいそうだ。警備員の人に始まる時間をたずねてみると、「だいたい、船がここまで来るのは６時半ごろかなぁ」と。よく聞いてみると、始まる時間ははっきり決まっていないそうだ。

精霊流しとは、初盆を迎えた故人の家族らが、盆提灯や造花などで飾られた精霊船と呼ばれる船に故人の霊を乗せて、「流し場」と呼ばれる終着点まで運ぶものである。長崎市五島町をはじめ、流し場は各地にある。また流し場についたらそれまで運んできた精霊船を船の担ぎ手が合掌するなか解体する。精霊「流し」というくらいなので昔は船を川や海に流していたらしいが現在はほとんど行われていない。精霊船はロウソクや電球をはじめさまざまなもので装飾が施されており、色鮮やかで見た目にもとてもきれいだ。

しばらく時間をつぶした後、また来てみると精霊流しはもう始まっていた。初めに耳に入るのは爆竹の音。たしかに耳栓がないとつらいほどの大きな音。絶え間なく続くたくさんの人の話し声と、はじけ飛ぶ爆竹に驚いた人の短い悲鳴もたまに聞こえる。

突然、「ピューッ」っという打ち上げ花火の音が鳴る。「ザザザザ・・・」というような手持ち花火にねずみ花火。火が消えるまでの短い間だが思わず童心に帰ってしまいそうなにぎやかな音があちらこちらでなっていた。

しばらくして、さわがしい音に慣れてくると船の担ぎ手の掛け声にも注意を向けることができるようになってきた。叫ぶような大声でその時はなんと言っているのかわからなかったが、のちに調べてみると「どーいどーい」という掛け声らしい。南無阿弥陀仏を大声で言いやすいよう省略したそうだ。

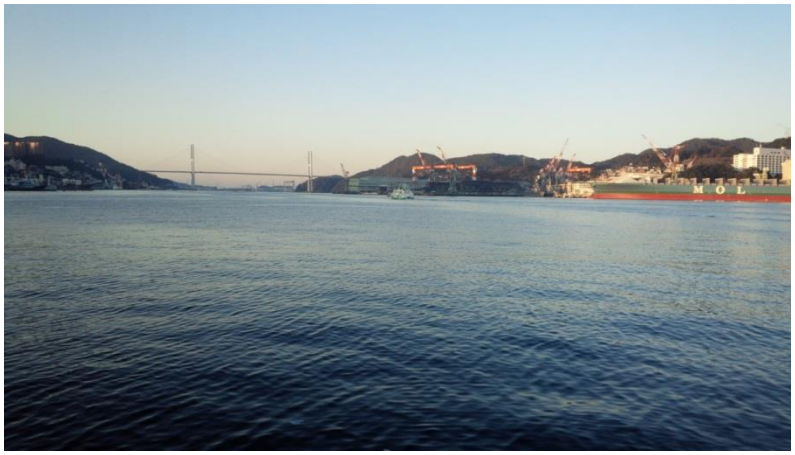
また、しばらくして耳が慣れてくると聞き逃していた音に気が付いた。「チャコーンチャコーン」という鐘の音だ。ほかの音が騒がしいためか、鐘の音は耳にやさしい気がした。にぎやかで騒がしく、それでいて厳粛な。精霊流しはまったく反対のような音を秘めていた。（濱本理華子）

作成協力： 荒木奈都子、水田玲美

写真参照：www.nagasaki-tabinet.com

## １４．水辺の森公園

アクセス:長崎電気軌道出島電停から徒歩3分、市民病院前電停から徒歩1分もしくは、
JR 長崎駅から徒歩 20 分



水辺の森公園は広大で、様々な音風景を感じることができた。大地の広場では、ワーワーと大声を出しながらバドミントンに興じる親子連れや、イチ,ニイ,サンとかけ声に合わせて集団でストレッチするお年寄り、クラブ活動なのだろうか、おそろいのジャージを着て黙々とランニングする中高生など幅広い年代の人が体を動かして汗を流していた。水辺のプロムナードには、花が咲く季節になると白い花であふれるおしゃれな水辺の公園レストランがある。運河の中にたたずむ白いレストランで、風景を楽しみながら食事をする家族連れやカップルが多く見られた。おのおの何を話しているのかはわからないが、みな楽しそうに談笑していた。また、公園の周辺には腰をおろすスペースがたくさんあり、そこには色々な人が座っていた。ひとりで静かに本を読む老人や、ギャーギャーと興奮して遊ぶ子どもを見守る母親、肩を寄せ合いひそひそ語り合うカップル、ジョギングの途中でハアハアと息づかいも荒く休憩する中年のおじさん、学校帰りに買い食いして友人とぺちゃくちゃおしゃべりする中高生など、少し耳をそばだてるだけでさまざまな人の気配を感じることができた。人が多く集まるこの場所には、やはり人の気配が充満しているのだろう。

人の息づかいだけでなく、自然やモノが生み出す音風景も感じることができた。海が近いので、ザーザーという波の音やヒューヒューという風の音がよく聞こえた。今回は聞くことができなかったが、汽船の発着所である大波止ターミナルではブォーという汽笛の音を聞くこともできる。水の庭園では、噴水がサーッと吹き出してサラサラ流れ落ちる様子が見られた。また、音はしないが、公園に散在する独特な形をした石のオブジェを見ていると心が落ち着いた。

このように、水辺の森公園では人と自然・モノが作り出す多種多様な音風景を鑑賞することができる。みなさんも一度訪れてみてはいかがだろうか。（鈴江　正義）

作成協力：與儀達朗、山崎貴浩、後藤慶充　福島真実　、中原誠大

## １５．長崎大学文教キャンパス裏の浦上川周辺

アクセス：長崎大学前電停で下車。長崎大学文教キャンパスの裏門を出て、ローソンと純心高校の間を道なりに進み、橋を渡り左に曲がるとある。

紹介文・・・・・・

川の両側は住宅街でちょっとした公園があったりベンチがあったりする。この川は周辺の住民の生活と共にあると思う。このように人々の生活に馴染んでいる浦上川は、あの時もまた人々と一緒だった。あの原爆投下の日、多くの人がこの浦上川に水を求めて飛び込んだそうだ。その日から浦上川は人々の鎮魂の場ともなった。

すんだ川を覗くと赤や黒の大きな鯉が泳ぎ、もう少し目を凝らせばもっと小さな魚がたくさん泳いでいるのが見える。その魚たちが時々太陽の光を反射してキラキラと輝いて見える。季節に応じて様々な鳥を見ることができる。鳥が魚を狙って忍び足で近づく様子を見ていると、聞こえるはずのない鳥の呼吸まで聞こえてきそうな気がする。しばらく歩き進むと、川の音が聴こえてくる。そこにさらに近づくと複数の音が重なって構成されていることが分かり、思わず歩みを止めたくなる。そこがベストポジションだ。向こう岸に子供の集まる公園や純心高校があり、子供の声や女子高生の声もサウンドスケープを構成する。また雨が降った次の日は異なる趣が感じられる。雨の程度にも因るが、水量が増し、晴れの日には聴こえない、力強い音が聴こえてくる。

この川は夜来ると、魚が水面から飛び跳ねる様子が見られる。飛び跳ねた魚はまわりの民家の明かりや街灯、月の光に照らされて一瞬光り、またすぐに水面に戻る。夜の静けさの中にピシャリという小さな音と、そのあとしばらく揺れる水面が規則的でありながらどことなく幻想的な印象を与える。昼の活気とは違った雰囲気の冷たくて気持ちのいい空気が、その日一日がんばった自分をねぎらってくれるような気がする。

今回、単に「浦上川」ではなく、「長崎大学文教キャンパス裏の浦上川周辺」と、限定したのには訳がある。それはこの音風景の選定の主役は我々長大生だからだ。長大文教キャンパスから最も近い自然であり、「長大生が選ぶ」というテーマに最適だと考えた。また文教キャンパスから最も近い自然でありながら、このサウンドスケープを意識したことのある長大生はあまり多くはいないだろう。通学路にあるこの川は普段は足早

に川沿いを歩くだけだが、足を止めて耳を澄まし周りを見渡すと今までにない気づきがたくさんあった。人の手できれいに整備されてはいるが鳥や魚が集うこの川は自然の要素も十分に備えており、人と自然の共存を見ているように思える。

冬は缶コーヒー、夏はコーラでも飲みながら、耳を澄ましてみてはいかがだろうか。

（野中陽介）

作成協力：安永奈津子、深水さき

←住宅街と浦上川

↓雨の日の翌日に撮影

## １６．権現山展望公園

アクセス：樺島行き、バス停「野母新港」で下車
（中心部から遠いので車で行くことをおすすめします）

12 月 27 日の午後２時頃、権現山展望公園へ行った。権現山は野母崎半島の先端にあり、この場所は日本本土の最西端でもある。今回はこの場所まで車で行った。

到着して車から降りると、森林に囲まれた 80mほどの坂をのぼり、権現山の展望公園へ向かった。その途中、「チュンチュン」、「ピッピッ」と、たくさんの鳥たちの鳴き声が迎えてくれた。赤いレンガの階段を「コツコツ、コツコツ」と足音を立てながら展望台へのぼると、そこには果てしなく広がる海や遠くに島などが見え、とても綺麗な景色が広がっていた。ここは江戸時代以前から、貿易船などを見張る遠見番所が置かれていたという場所だけあり、とても見通しが良かった。この日は風がとても強く。「ピュウウウウウ、ビュウウウウ」、と高い悲鳴のような風の音がしきりに聞こえた。また、その風に煽られた周りの木々たちが、さわさわさわ、ざわざわざわ、と揺れる音が重なり合い、ときおり風がやむと、「ゴォォォォォォ」という波の音も聞こえた。

展望台の真下には鐘があり、その鐘を突くと「ゴーーーーーーーン」という鈍く大きな音がして、その余韻の音がしばらく響いていた。この鐘は、世界平和を願う広島平和公園の悲願の鐘と呼応する夫婦鐘として建立されている“発起の鐘（まごころの鐘）”という鐘で、鐘を鳴らす度に平和を願い、まごころによって国境のない世界を実現し、人類永遠の平和を樹立したいという願いが込められているそうである。

人がいる場所から離れ、海に囲まれ自然の音だけが聞こえるこの権現山は、そこから見える景色とともに、人々に安らぎと癒しを与える場所だと思う。また、戦国時代には長崎港に入港してくる船をここから監視しており、外国船の渡来を急報するために作られた烽火台なども残っており、そして平和を願う鐘もあるこの場所は、長崎ならではの歴史も感じさせる場所である。（三宅杏奈）

作成協力：平川孔淳、宮森智之

## おわりに

表紙に使用している写真は、長崎大学文教キャンパスの夕暮れの風景です。何気なく撮影した日常の一コマ。何気ない日常の風景の中にも、心静かに目を向けると、そこには穏やかで美しい風景が広がっていたりします。同じように心静かに耳を傾ければ、特別な場所に行かなくとも、穏やかで美しい音の風景に出会えることが多々あります。

私たちは、日々、新しい情報をどんどんと取り入れ、昨日よりも今日、変化する日常とその行く先をとらえようとします。最先端の情報や知識も大切ですが、それと同じぐらいに（あるいは時としてそれ以上に）今この時を感じること。心静かに目の前のモノや音に心を向けることが大切なのではないでしょうか。

音の風景を聴くことは、今この瞬間を味わうことです。目の前に広がる風景に意識を集中し、味わう。ただ、それだけです。心の騒音をしずめ、ただひたすらに音の風景を聴く。たった 1 分で構いません。その恩恵が感じられると思います。過去に尋ねて学ぶこと、未来を見据えて最先端の知識を学ぶことも重要です。しかし、「今ここ」をしっかりととらえることは忘れられがちです。一日の中でほんの数分でも立ち止まり音の風景を味わう。そのことで「今ここ」を感じ取ることができるように思います。そして、「今ここ」を感じることは、せわしい世の中を生きる私たちにとって知識を学ぶことと同じぐらいに大切なことだと思うのです。

本取組は、教養教育の中でこそ行える講義内容です。受講生たちが各自の専門から離れ、広い視野を獲得するための教育の場で、今ここ、対象そのものを五感で感じ取ろうとする試みは重要だと感じています。今後も教養教育の一部として音の風景を感じ取る取組を続けていきたいと考えています。

そして、受講生の若者たちが学び、考え、感じたことをこうした形で社会の皆様に還元できることを心から嬉しく思います。私自身、本講義を行う中で、学生たちに教えられることがたくさんありました。こんな視点があったのかと驚いたり、忘れかけていた感覚を思い出させてくれたり、と。また、長崎県出身ではない私にとっては、本講義を通して知った音の風景や歴史も多々ありました。受講生たちの努力の集大成であるこの 16 選が多くの方々に利用してもらえることを心から願っております。

2014.2.10

長崎大学　教育学部
准教授　西田治

２０１３年　長大生が選ぶ“残したい長崎の音風景 16 選”

編集・発行者　　長崎大学教育学部　西田治　研究室
発行年　　2014 年 2 月 10 日